

第71回 「社会を明るくする運動」

作文コンテスト・・・3P
6P



高津川河口の白鳥



編集・発行

島根県益田市須子町3-1

益田地区保護司会



新任あいさつ

益田地区保護司会 会長 草野和馬

この度、益田地区保護司会の会長に就任しました。もとより浅学非才です。皆様方のご協力、ご指導を得ながら努めて参りたいと思います。

益田地区保護司会は法務大臣の委嘱により益田市と鹿足郡合わせ六十九名の会員で活動しています。地域の犯罪や非行を防止し、あ

やまちを犯した人が再び犯罪や非行をしないように立ち直りを支えることを目的としています。しかしながら、この大きな目標を私たちだけで出来るわけではありません。更生保護女性会、協力雇用主会、更生保護ボランティア等の協力を得ながら、七月の社会を明るくする運動、小中学生の作文

コンテスト、益田更生保護だより発行等の事業を進めながら、より多くの方に広く知ってもらい、理解を深めて頂き少しでも犯罪や非行のない安心で安全な明るい地域づくりを目指したいと思えます。命題は大きいですが、まずは、私の motto である朝の大きな挨拶から始めたいと思います。



社会を明るくする運動

津和野町長 下森博之

「社会を明るくする運動」も本年で第七十二回を迎えることができました。平素は、益田地区保護司会をはじめ多くの皆様が様々な活動に取り組んでおられ、敬意と感謝の意を表する次第であります。

本運動は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と犯罪や非行をした人達の更生

について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪の無い明るい地域社会を築くための全国的な運動です。

近年では、刻々と社会状況が変化しており、毎日のように事件・犯罪のニュースが報道されています。この背景には、人間関係の希薄化が原因とされており、犯

罪や非行を抑止するには地域の繋がりが必要となります。安全で安心な社会を築いていくために、関係機関・団体との更なる連携、地域の皆様のご協力が必要不可欠となりますので、本運動に對しまして、ご理解ご協力を承りますようお願い申し上げます。

プリズンサークル上映会

益田地区保護司会 副会長 杉原寛臣

令和三年十月二十五日(月)新型
コロナ感染防止に充分配慮し、「グ
ラントワ」小ホールにおいて「島
根あさひ社会復帰促進センター」
を舞台に撮影されたドキュメンタ
リー映画「プリズンサークル」を

益田地区保護司会主催、益田地区
更生保護協力雇用主会・益田市更
生保護女性会・鹿足地区更生保護
女性会の共催の下、参加者一六一
名で上映会を行いました。

同社会復帰促進センターは、
二〇〇八年に開設された刑務所
で、最大収容人員は二、〇〇〇名、
犯罪傾向の進んでいない受刑者が
服役しています。

この映画は、受刑者同士の対話
をベースに犯罪の原因を探り、問
題の対処方法を身に付けることを
目指し、更生を促すというプログ
ラム(回復共同体：以下T.Cとい
う。)に取り組む受刑者が描かれ
ており、主人公は窃盗や詐欺、強
盗殺人、傷害致死などで服役する

四人の若者たちが、新たな価値観
や生き方を身に付けていく姿を克
明に描き出していました。

ストーリーは、序章に始まり第
一章から第五章に分けて構成され
ており、四人の若者が違う時期に
T.Cに加わり、犯した罪だけでな
く、幼い頃に経験した貧困、いじ
め、虐待、差別などの記憶。痛み、
悲しみ、恥辱といった感情。そし
て、それらを表現する言葉を獲得
していく姿を支援員のサポートを
得ながら、これまで受けた虐待や
いじめ等の経験と向き合い、人を
傷つけたことへの反省や自分が犯
した罪への理解が深まる一方で、
T.Cに参加して人間らしいコミュニ
ケーションが取れる環境、自分
の罪と向き合える環境づくりを取
り組んでいました。

出所後も元訓練生と支援者の交
流会や出所後も相談できる人がい
るといふ安心感が、彼らの第二の
人生を支えている姿が映し出され

ていました。

罪を犯した人と向き合い更生を
後押しする保護司だけに止まら
ず、出所者の気持ちを温かく迎
え入れる
世間の寛
容さを更
に醸成す
る必要性
を感じた
ドキュメ
ンタリー
映画でし
た。



第71回 “社会を明るくする運動” 作文コンテスト

中学生の部

島根県BBS連盟会長賞

益田市立益田東中学校
二年

山根唯那

犯罪のない社会へ



「ありがとうございます。初めて大人の人に感謝しました。」

れる出来事が起きたのは、小学校六年生の時でした。塾からの帰り、ちようど家の前に来た時、私はあるものを見つけました。それは、黒い長財布でした。私はその財布を見たとき、どうするべきか迷いました。そのまま置いておこうか、それとも拾うべきかなのか。でも、そのまましておくのも嫌だったので、母に見せ、母と一緒に警察に届けに行きました。次の日、警察から電話が来ました。財布

の持ち主が見つかった、その方が直接お礼を言いたかったので、住所を教えてもよいかという内容の電話でした。母が「教えてもいい」と言ったので、持ち主の方が家まで来られました。その方の話によると、夜歩いていたら、かばんを盗られたそうです。犯人は財布の中身だけ抜き取り、財布は捨てたようでした。財布の中には、大事な免許証とかが入っていたので、持ち主の方はとても困っていたそうです。その話を聞いて、私は「財布を拾ってよかったな」と思いました。そして、財布は落としたのではなく、盗まれたのだということを知りました。持ち主の方は、「自分がこんな目にあうとは思わなかった」と言っていました。私も、自分の身近なところで、こういう犯罪が起きていたことに驚きました。普段は、犯罪に巻き込まれることなくって意識すらしてないし、テレビで犯罪のニュースが流れていても、「怖いな」とは感じるものの、どこか遠い世界で起き

ている出来事のように受け止めていました。しかし今回のことで、「私は大丈夫」「犯罪になんて巻き込まれることはないだろう」という甘い考えが、一番危険だと思われ知らされました。いつ、だれが犯罪に巻き込まれてもおかしくないということを、一人一人が意識することが大切だと思います。小学生の頃のこの出来事は、今でも強く印象に残っています。持ち主の方の、ほっとした表情を思い出しながら、犯罪のない社会は作れるのだろうか、と思いました。私はまだ中学生ですが、中学生ができることはないだろうか、犯罪がどうして起きるのか、罪を犯す人の気持ちは私には分かりません。でも、もしそれが心の寂しさから起きることならば、その寂しさをなくす社会をめざすことが、犯罪のない社会につながるのかもしれない。例えば、罪を犯す人の心の寂しさを少しでもなくすために、あいさつをしたり地域の人と関わるのが大切だと思います。実際に私が学校に行くときは、横断歩道や歩道に立ってあいさつをしてくださる方がいます。

話しかけてくださる方もいます。そうやって少しずつ地域内で繋がりをもつことで安全な町にできると考えました。

でも、あいさつをしたり、地域の人とつながりをもったからといって犯罪が完全になくなるわけではありません。そして、犯罪は一人の力で防げるものでもありません。だから一人一人が自分にできることを考え、意識するだけでも少しずつ「犯罪のない社会へ」向かっていけると私は思います。



小学生の部

法務大臣賞（最優秀賞）

福井県越前市武生南小学校
六年

川本 一翠

「ふつう」を知った日

「その人と家族とどっちが大事なの。」

姉が祖母に強い口調で言った。よく聞いていなかったが、祖母が保護司をしていることについて話をしているらしかった。

保護司は、保護観察というのを受けた方をサポートする仕事だ。良いことなのに、いやな言い方をしている和感があった。

祖母は、保護司に関わる色々な資料を姉の前に置いて部屋にもどった。自分で考えなさいというときの祖母だ。

姉がパラパラとめくりだしたのを見て、一しよに見た。姉は、おこつたような顔をしていた。

「良いことなんじゃないの？」
というとき、私にも食ってかかってきた。

「犯罪を犯した人と会うってことは、家族にもき険があるってこと。簡単にいいっていいのは、家族を大事にしていないってことだと思う。」

何も言えなかった。急に、姉の方が正しいように思った。

姉にかくれて祖母の所に行った。

「ばあば、やつぱり少しこわい気がしてきた。」

祖母は、少し困った顔をして、でも、しつかりと目を見て私に言った。

「一翠は、いややなあって思うことない？目のこととかで、困ったことない？」

私は目がとても悪く、特別な眼鏡をかけているし、そのことでもやな思いをしたことがある。眼鏡を無理矢理外すように言われて、レンズが取れてしまったこともあった。

その日は、全く周りが見えなくて、ずっと困ったし、ただずっと泣くことしかできなかった。単純な弱い者いじめではないけれど、他の人が分からないことが、本人にはとても大切で、困ることがある。

当たり前前だと思っている正しさがある。正しいとは限らないこともある。知らない間に相手にとって悪いことをしているということもある。

私は、困ったとき、祖母を含め、色々な人に助けってもらってきた。目が悪いと分かったときは、家族中が心配した。複数の病院に行っていた。小さかったのでよく覚えていないけれど、私は、初めて眼鏡をかけて保育園に行った日、体が固まって、声も出なくなってしまう。

母は、私の前では決してなみだを見せなかったが、何よりつかったと言っていた。でも、保育園の先生方が折り紙で眼鏡を作ってくださり、友達の中でも、「ふつう」に過ごせるようにしてくださった。ご近所の方も、同じような眼鏡のお姉さんがいて、経験を教えてくださった。学校でも同じクラスに眼鏡の友達があった。色々なサポートがあって、今の私がある。「眼鏡の私」が、「ふつうの私」でいられるのは、私だけでは無理だった。祖母は私の話を聞いて、「そういうことなんだよ。」と言った。

祖母がたん当させていた。いてる方は、祖父と同じくらいの子供の間通りに来るのができなかったり連絡を忘れてしまったりしてしまう。それでも、祖母は、毎回約束して、話を聞く。

「ふつう」ってとっても大切なんだよ。」

とも言った。たん当している方は、よくわからないまま罪を犯してしまった。規則正しく生活をして、仕事をして、家族と暮らす。

この「ふつう」を取りもどしていただくための仕事だと思っていると言った。たん当の方のご両親は祖母がうかがったとき、両手をにぎって、「お願いします。お願いします。」と何回も泣きながらおっしゃったそう。祖父と同じような年れいのご両親だから、相当年

れいが上の方の方のだけれど、大切な家族のことを思って、他人である祖母に心からの言葉を伝えてきたそう。祖母はいつも言う。

「罪を犯してしまうということ、やはり社会がどこかおかしいということなんだよ。」

正直、罪を犯す人は「悪」としか考えていなかった。もし、自分の大切な人が助けを必要としていたら、全力で助けようと思うし、現に、私も、私のことを大切にしてくださいる方のサポートのおかげで、今がある。それはサポートを必要とする方をはあくし、必要な援助をする仕組みがあることが必要だ。

姉が、祖母の部屋に入ってきた。

「悪いことをするために生まれてきた人はいないってこと分かった。ごめん。」

と、姉が祖母に言った。祖母は、「考えてくれてありがとう。」とだけ言った。

大切なのは、こういうことなんだと思つた。社会全体が関心を持つこと、考えること。全員が不満の無い社会は、正直難しいと思うけれど、それでも、少しでも多くの方が、祖母のいう「ふつう」を感じる事ができる社会、それが、祖母が保護司をしている希望なんだと思う。私も姉も社会の一員だ。だから、考えることをやめずにいようと決めた。

母は、私の前では決してなみだを見せなかったが、何よりつかったと言っていた。でも、保育園の先生方が折り紙で眼鏡を作ってくださり、友達の中でも、「ふつう」に過ごせるようにしてくださった。ご近所の方も、同じような眼鏡のお姉さんがいて、経験を教えてくださった。学校でも同じクラスに眼鏡の友達があった。色々なサポートがあって、今の私がある。「眼鏡の私」が、「ふつうの私」でいられるのは、私だけでは無理だった。祖母は私の話を聞いて、「そういうことなんだよ。」と言った。

中学生の部

法務大臣賞（最優秀賞）

宮城県仙台市立幸町中学校
三年

鈴木心晴

誰もががっかりを感じられる

社会を目指して

今日もまた、テレビや新聞で様々な事件が報道されている。中でも、悲しく恐ろしい犯罪のニュースは、聞かない日はないと言ってもいいだろう。私は、それらを目にするたび、加害者はなんて凶悪で憎らしい人なのだろう、と無条件に嫌悪感を抱いていた。そう、あの本を開くまでは。

この夏休みに、抜けるような青空の写真にひかれ、偶然手にした一冊の本。それは、罪を犯し、奈良少年刑務所に収容されている少年達の詩集だった。

彼らの詩は、私の予想とは正反對に素直な言葉で書かれていた。その中ににじむ後悔や反省には心が揺さぶられた。涙がこらえきれない作品もあった。その真つすぐで、時に優しさあふれる言葉が、強盗、傷害、殺人といった恐ろしい罪を犯した人から発せられたなんて信じられなかった。

それらの詩は、受刑者の立ち直りを目指すプログラムの中で書かれたそうだ。

「ぼくのすきな色は 青色です
つぎにすきな色は 赤色です」
例えばこのように、ある受刑者が自分で書いた詩を発表する。すると他の受刑者が、
「好きな色を教えてもらって嬉しかった。」
と感想を伝えるといった内容だ。私は初め、たったそれだけのやり取りに何の意味があるのか全く分からなかった。

読み進めると、その詩を書いた彼は、好きな色を尋ねられたことさえないほどに、誰からも関心を向けられたことがなかったと分かった。皮肉にも、刑務所で初めて気持ちを受け止められ、それが心から嬉しかったと読み衝撃を受けた。さらに、幼稚園や小学校に通った経験がなかったり、大好きな両親から虐待を受け続けたり、辛く苦しい幼少時代を過ごした人が少なくないことも知った。それがどれだけ寂しく孤独かを想像しただけで、胸が詰まる思いがした。

もちろん、犯罪は決して許されるものではない。しかし、罪を犯すに至るまでの彼らの壮絶な状況を思うと、彼らだけの責任とは言い切れない、誰かが気づいて思いを受け止めていたら、育ってきた環境が少しでも違っていたら、と思

わずにいられたなかった。実際に、詩を認められて自信を回復し、立ち直っていく受刑者の姿がそれを物語っていると感じた。

今自分の周りを見回すと、家族、友達、先生、困った時に話を聞いてくれる多くの人の顔が思い浮かぶ。思いをぶつけ、互いに許し、笑い合える人がいるその環境が、実はとても幸せで心強いことだと改めて感じた。たった一人でも自分を受け止め認めてくれる誰かがいること、それこそが辛い時でも踏ん張り、前を向くパワーの源になると考えさせられた。

私は、「加害者は劣悪な人」と決めつけていたこれまでの自分を反省した。生まれながらの犯罪者などどこにもいないのだ。罪を犯した彼らの多くが、社会の中で居場所を無くし、隅に追いやられ、疎外感を感じた結果、踏みとどまらずに感情を爆発させてしまったのだと思えてならない。

人と人との関係の希薄さや、人々の無関心さが彼らを追い詰めたのだとしたら、これからは誰も孤独にさせない、つながりのある社会を作ることが大切だ。それにより犯罪を減らすことだつてできるかもしれない。

そのために私達にできることは何だろう。その一つは「挨拶」ではないだろうか。
私の学校でも「あいさつ運動」が行われている。私も実際に挨拶

をすることで、初めて言葉を交わす相手との間にも、安心感や信頼感が生まれることが実感できている。

挨拶は、「あなたと仲良くしたい」「あなたに関心を持っている」という大きなメッセージでもあると思う。された側は、「自分の存在が認められた」と感じ、気持ちが高まったされていく。一言の挨拶をきっかけに会話が生まれ、そこからよりよい関係につながることもあるだろう。さらに、挨拶にはその場の雰囲気明るくしたり、笑顔を増やしたりと様々な効果もある。また、挨拶の返答やその表情から、今相手が置かれている状況を想像し、寄り添い、言葉を掛けることだつて可能だ。しかも、人と人をつなぐその方法は、僅かな心掛けと、ほんの数秒の時間さえあれば、誰にでも簡単に実行できるのだ。

私は今、相手に伝わる挨拶ができていくだろうか。まずは自分から、家族、学校、地域の中で、自分の心を開き、気持ちを届けられるような挨拶を心掛けよう。

小さな心掛けが社会全体に広がって、全ての人が「自分は社会の大切な一員だ」とつながりを実感できるようになったら嬉しい。そしていつか、刑務所さえも必要なくなるような、そんな明るく温かい社会になる日が来ることを願っている。

中学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞(優秀賞)

島根県浜田市立旭中学校
三年

岡山 祐子

社会を明るくするための

積み重ね

私の住んでいるところの近くには社会復帰促進センターという建物が建っている。その建物の近くには社会復帰促進センターで働いている方やその家族の方がたくさん住んでいる建物があり、私の友達も住んでいるなじみのある建物だ。だが、私はあまり社会復帰促進センターについて知らなかったし、知ろうとも思っていなかった。私が小学五年生の時、給食で初めて「おコッペ」というコッペパンがでた。私は給食でパンがでるのは初めてだと思った。だから楽しみだったし、嬉しかったのを覚えていた。その時たかさんのカメラマンの人や取材をする人、たかさんの人がいて、なぜこんなに人がいるのだらうと、とても不思議だった。そして、いつも通り合掌

するときになると担任の先生がこうおっしゃった。

「このパンは社会復帰促進センターの方が作ってくださいました。感謝して食べましょう。」

当時の私にとっては、給食を作っている人以外の人が作ってくれたんだあというくらい感覚だった。

中学生になるとおコッペの説明会が行われるようになった。おコッペの説明会は、実際に社会復帰促進センターで働いていらっしやる刑務官の方が学校に来ておコッペについて説明するという内容だった。説明の中で一番衝撃を受けた言葉が、

「社会復帰促進センターの受刑者が毎月、皆さんにおコッペを作り、届けています。」

だった。この言葉を聞いたとき、受刑者の方が作ったパンは大丈夫なのか、と少し不安を感じたし、怖いなど恐怖も感じた。

そして、説明会が終わったあと、受刑者の方からの手紙に対して、自分が書いた手紙を送る時間があった。ホワイトボードに飾られた、たかさんの受刑者の方々の手紙を見にいくと、温かい言葉のものばかりだった。私達の年と同じくらいのお子さんがある人や、

毎月私達が楽しみにしてくれると思いたかさんの量を喜んで作ってくださいている人、頑張って作ってくださいる人、そんな方がたくさんおられた。私は受刑者の方を、心の中で怖い人で近付きたくない、勝手に思っていた。そう感じている人も少なくないと思う。

しかし、本当は社会にでたときに、仕事にすぐ就けるようにと、これからのことをしっかり考え、今も頑張つて日々おコッペを作っている。また、それ以外にも社会復帰促進センターでたかさんのことをのりきり多くの事に挑戦し頑張っているはずだ。また刑務所や社会復帰促進センターで日々罪を償いながら過ごし、世の中に復帰していると思う。説明会の中で刑務官の方が、こんな言葉を言われた。

「受刑者が社会復帰したとき、その人と家が近所になったりしても、決して避けないでほしい。普通の人と同じように、挨拶をしたり会話をしたり接してほしい。そうするだけで再犯率はぐっと下がります。」

この言葉を聞いたとき、考えるとしたしかにそうだと感じた。もし、自分が刑務所からでて人生をやり直そうと決心したのに、周り

の人に避けられ、また陰口を言われていると感じたら、どんな気持ちになるのだろうか。きっと、再び刑務所に行く方が楽だと思ってしまう。また、仕事に行くのや、外に出るのもつらくなると思う。私とその立場ならきっとまた、犯罪に手を染めているだろう。

きっと受刑者の周りのいる人達の態度で、受刑者の方の人生は、良い方向にも悪い方向にも傾くだろう。一人が考えを変えるだけで、一人の人生が変わるのなら、絶対に自分の行動、言葉を考え直す必要があると思う。

これは、受刑者の方以外の私達にも当てはまる場面があると思う。例えば、朝、元気のある明るい挨拶をされると、暗かった気持ちも明るい気持ちになる。また辛い時、声を掛け、励ましてもらうだけで心が軽くなり、希望が生まれる。少しの会話の積み重ねが大きな幸せとなる。

自分の一つの小さな行動が積み重なり、そして、その行動につながる人が増えることがきっとこれからの社会を明るくしていく。自分たちの力で社会を明るくしていく。

自分がそれらの行動のスタートとなる。

第71回『社会を明るくする運動』

令和三年七月一日「第71回社会を明るくする運動」のメッセージ伝達式が益田市・津和野町・吉賀町で行なわれました。

益田市



津和野町



吉賀町



表彰

◆令和三年度 (敬称略)

法務大臣表彰

〔保護司〕

大内 宗泰 (鹿足)
田中 勝治 (益田)

全国保護司連盟理事長表彰

〔保護司〕

田中 宣隆 (益田)
田村 庄道 (鹿足)

日本更生保護女性連盟
会長表彰

〔更生保護女性会員〕

栃嶋 智勢子 (益田)

中国地方更生保護委員会
委員長表彰

〔保護司〕

舛山 久己 (益田)
佐々木 千鶴 (益田)
杉原 寛臣 (益田)

中国地方更生保護委員会
委員長感謝状

〔更生保護女性会員〕

熊谷 恵美子 (益田)
青木 ヤス子 (益田)
中村 千恵 (鹿足)

中国地方保護司連盟会長表彰

〔保護司〕

寺戸 啓介 (益田)
大畑 トモ子 (益田)
品川 正明 (益田)
三尾 利幸 (益田)
村川 逸子 (益田)

中国地方更生保護女性連盟
会長表彰

〔更生保護女性会員〕

川本 道子 (益田)
大石 素子 (益田)
伊藤 紀子 (鹿足)

松江保護観察所長表彰

〔保護司〕

石井 正 (鹿足)
大庭 和子 (鹿足)

松江保護観察所長感謝状

〔更生保護女性会員〕

城市 智津子 (益田)
岡崎 光代 (益田)
福岡 陽子 (益田)
福田 尚子 (益田)
小郷 ナミ子 (益田)
片廻 ナミ子 (益田)
森脇 久子 (益田)
坪田 幸子 (益田)
石田 泰子 (益田)
堀庭 イチ子 (益田)
大庭 弥生 (益田)
下瀬 利恵 (益田)
中村 圭子 (益田)
吉田 雄子 (鹿足)

島根県保護司会連合会長表彰

〔保護司〕

中村 浩美 (鹿足)
村上 京子 (鹿足)
中野 ミナコ (鹿足)
松陰 ムツ子 (鹿足)
上山 ナツエ (鹿足)

島根保護観察協会理事長
感謝状

〔特別会員永年協力者〕

齋藤 等 (鹿足)
宅野 万紀 (益田)
廣瀬 健男 (鹿足)
宮内 真也 (益田)
山本 靖子 (益田)
熊谷 利範 (益田)
栗栖 美由紀 (鹿足)

〔有〕寿美工務店

取締役 齋藤寿美生 (益田)
報国寺 山崎 満徳 (鹿足)
〔賛助永年会員〕
JAしまね柿木支店 (鹿足)

保護司会役員

会長 草野 和馬
副会長 宮川 公子
副会長 木村 與志雄
副会長 杉原 寛臣
総務部会長 杉原 寛臣
犯罪予防部会長 品川 正明
研修部会長 吉中 久力
協力組織部会長 舛山 芳史
事務局長 富岡 芳史

保護司の異動 (敬称略)

退任

令和三年十一月三十日
岡崎 卓子 (益田)
令和四年五月三十一日
田中 勝治 (益田)
令和四年六月三十日
寺戸 保人 (益田)

新任

令和四年六月一日
寺戸 修二 (益田)

毎月 第3日曜日は

家庭の日

大人が変われば
子供が変わる

おあしす運動

- おはよう。
- ありがとう。
- しつれいします。
- すみません。